

メディア利用による 日本語会話授業の探究

—情報とメディアのリテラシー教育の視点から—

OCHIAI Yuji/落合由治

Tamkang univ. Department of Japanese/淡江大學日文系 副教授

【摘要】

根據日本國立國語研究所的調查報告顯示，台灣的學生在上日文會話課上，偏愛活的教材，希望能直接接觸日本人或日本事物。而教師的立場方面，台灣籍的老師比較喜愛學生不喜歡的教科類，而日本籍老師也不太愛用學生偏愛活的教材。此般學生與教師對教材喜好的差距，可謂今後日語教育學界的大課題。正視此課題，於是本論文先以數據說明學生對活教材以及網路的興趣，繼之，吸收在日本的資訊以及運用資訊媒體的能力，還有最新開發的部落格，運用於日文授課上，提升學生的會話日文能力以及開口說日文的意願。

【Abstract】

Japanese teaching materials which the student uses according to Japan' National Language Research Institute and the teaching materials to hope for in the future are so-called " the crude teaching materials ".The student is strongly in the tendency to hope for the direct contact with the Japanese. The Formosan teacher has an interest too much in the teaching materials which the student doesn't hope for. The Japanese teacher isn't having an interest in the crude teaching materials which the student hopes for. Such a mismatch may become the big problem for the Japanese-language education world in Taiwan. This paper introduces the interest to a student's concern and the Internet to crude teaching materials from data first. Next, this paper takes in the "information education" from a viewpoint of media literacy. Finally, this paper proposed the idea which utilizes BLOG which has newly appeared by lesson.

【關鍵字】

日本語教育、活教材、資訊、運用媒體的能力、部落格。

1. はじめに

台湾での日本語教育の先駆者の一人である蔡茂豊氏は、台湾での日本語教育現場の現状について、2004 年 11 月の台湾日本語教育学会主催「日語教育與日本文化研究国際學術研討会」でのスピーチで述べている¹。これに拠れば、1997 年から、台湾の日本語教育は第三段階に突入し、一般教育での日本語文学系、応用日語系、技術職業教育での応用日語系に、大学での第二外国語としての日本語という教育体系が整った。しかし、蔡氏は、この 1997 年以降について現場での混乱を指摘している。

実務指向の応用日本語学科が出現し、思いがけなく、学界では研究指向と実務指向との区別がはっきりせず、どのように歩調を合わせるか面食らったのである。

(中略)

筆者の判断では第三段階における台湾の日本語教育は、一部は第二段階で足踏し、学問領域としての『日本語教育』のあり方を模索中で、これからと言ったところである。そして、それを除く大部分は第一段階にいて、逆戻りの状態にいると見るのである(蔡茂豊 2004:29)。

蔡氏は、それぞれの機関で、どのような「日本語教育」を行うのかを模索する第一段階への逆行という問題を提起している。現在、台湾では日本語教育の内容について、大きな見直しが迫られていると言える。

一方、日本独立行政法人国立国語研究所『2004 年度台湾日語教育之學習環境與學習方式調査統計結果報告書』²によると、学習者の学習環境にも注目すべき特徴が見られる。まず、なるべく生の日本や日本語に接しようとする強い希望が存在し、日本語を使う機会も教室内で学ぶ日本語からより広く生活の中で接触する日本語へと場が拡大している。特に、テレビ番組、歌、インターネットなどメディアを通しての日本語や日本的・社会・文化などへの接触が多くなっている。ここから、各種メディアを通して学生がどの

¹蔡茂豊氏による台湾の日本語教育に関する現在の状況は、蔡茂豊(2003)に詳細にまとめられている。詳細については、「第一章第六節日本語教育の多岐期(1996～)」を参照。

²独立行政法人・国立国語研究所(2005)を参照。高等教育での調査は学習者2075名と教授者133名に2003年12月から2004年2月にかけて実施された。学習に関わる環境を詳しく聞いており、調査時期が新しく、調査数も多くて現在の台湾の高等教育での日本語学習の実態を見る上で、適した資料といえる。なお、調査結果概要は調査を担当した藤井彰二(2005)で、また、金田智子主任研究員により2005年12月の台湾日本語文学会研討会で発表された。

ように日本語と日本社会・文化への理解を進めているかが、大学や教授者の側から見えにくくなっている状況が伺われる。こうした学習者の動向は、台湾の高等教育で今後日本語教育内容の再検討を行うとき、大きな課題となる可能性が考えられる。

そこで、本論文では、対象を高等教育に限り、まず『2004 年度台湾日本語教育之學習環境與學習方式調查統計結果報告書』から浮かぶ学生の学習動向を紹介する。次に、日本語学習者と情報とメディアとの関係について、日本で行なわれているコンピュータや各種メディアに関するリテラシー教育³の視点から紹介し、台湾での活用を探る。最後に、そうした情報とメディアに関するリテラシー教育の視点から、最近新しく登場してきたブログとインターネットラジオを日本語会話授業で活用するアイデアを提案する。

2. 日本語学習者の学習行動の傾向とその課題

最初に、台湾の高等教育での日本語学習者の学習での関心と動きを最近の調査データから捉える。国立国語研究所（2005）は、以下のような、注目すべき調査結果を出している。なお、以下に示すグラフ 1-1、1-2、1-3、2-1、2-2 は、国立国語研究所（2005）のデータをもとにして、傾向が見やすいように、高等教育の部分だけを取りだして数値を5%の刻みでの概数に直し、論者自身が作成した。また、原文の項目名は中国語なので、引用にあたって、論者が日本語に直したものである。

2.1 高い「日本」自体の情報への関心

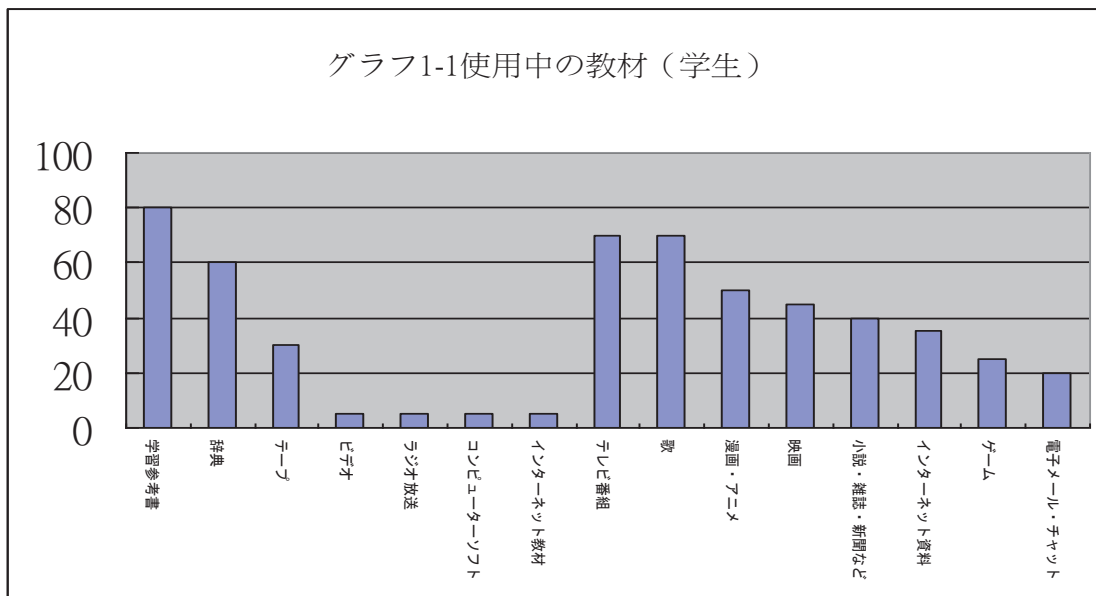
まず、特徴的なのは学習者の学習動機である。調査では、日本語の学習動機として、第1位から第5位まで順に「日本語に興味があるから」、「日本のものが好きだから」、「学校に日本語があるから」、「日本に関心があるから」、「就職に有利だから」が上がっている（国立国語研究所 2005：26）。動機のうち四つは、「日本語」への関心の高さと同時に「日本のもの」や「日本」そのものへの関心の高さが窺われる理由である。つまり、現在では、「就職に有利だから」という実利志向を越えて、「日本のもの」や「日本」そのものへの関心の高さから日本語が学習されていると考えられる。

³ リテラシーとは、もともと読み書き能力をあらわしていたが、現在では、コミュニケーション能力全般を指すこととなり、コミュニケーションにかかわる特定の分野における処理能力を指すようになっている。

2.2 強い「生教材」「生の日本語」志向

この「日本のもの」「日本」そのものへの関心の高さに相応しているのは、学習者が「現在学習に使用している日本語関係の教材・素材（グラフ 1-1）」である⁴。調査によると、学習用教材（参考書 80%、辞典 60%、テープ類 30%、ビデオ類・ラジオ放送・コンピュータソフト・インターネット教材各 5%）に対して、生教材（日本語テレビ番組・歌 70%、日本語の漫画・アニメ 50%、日本語の映画 45%、日本語の小説・雑誌・新聞 40%、インターネット資料 35%、日本語のゲーム 25%、電子メール・チャット 20%）が挙げられている。この結果を見れば、学習用教材より、かなりの割合で、さまざまな生教材が好んで利用されていると言え、学習者には、自主的に生の日本語に触れる機会を増やし、また、それに触れたいという希望が、かなり高いと思われる。

さらに、学習者が「今後充実させて欲しい教材・素材（グラフ 1-2）」を見

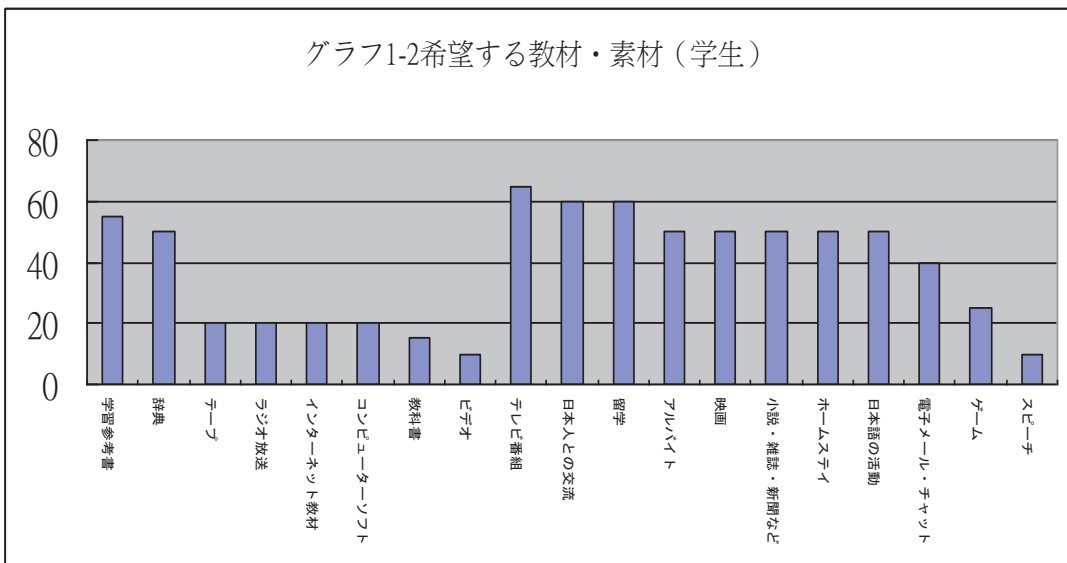


ても、確かに学習用教材では、参考書 55%、辞典 50%などへの要望は高いが、学習用テープ類、ビデオ類、ラジオ放送、コンピュータソフト、インターネット教材、教科書や、設定が人工的な日本語スピーチは、いずれも 5～20%で、学習用教材や学習用に設定された素材への需要は、必ずしも高いとは言えない。

⁴ 国立国語研究所（2005）50-53Pの資料を参照。

一方、それと対照的に、自然に近い日本語に触れることができる日本語テレビ番組 63%、日本人との交流・留学 60%、日本語の映画、小説・新聞・雑誌、日本人家庭へのホームステイ、日本語を使うアルバイト各 50%は、いずれも過半数以上になっている。また、日本人とのやり取り・電子メール 40%を合わせて考えれば、学習者の希望が高い素材は、いわゆる「生きた日本語」に触れる機会であり、「生の日本（語）」に接触することを重視する傾向が学習者の間に極めて強くあることが分かる。

グラフ1-2希望する教材・素材（学生）



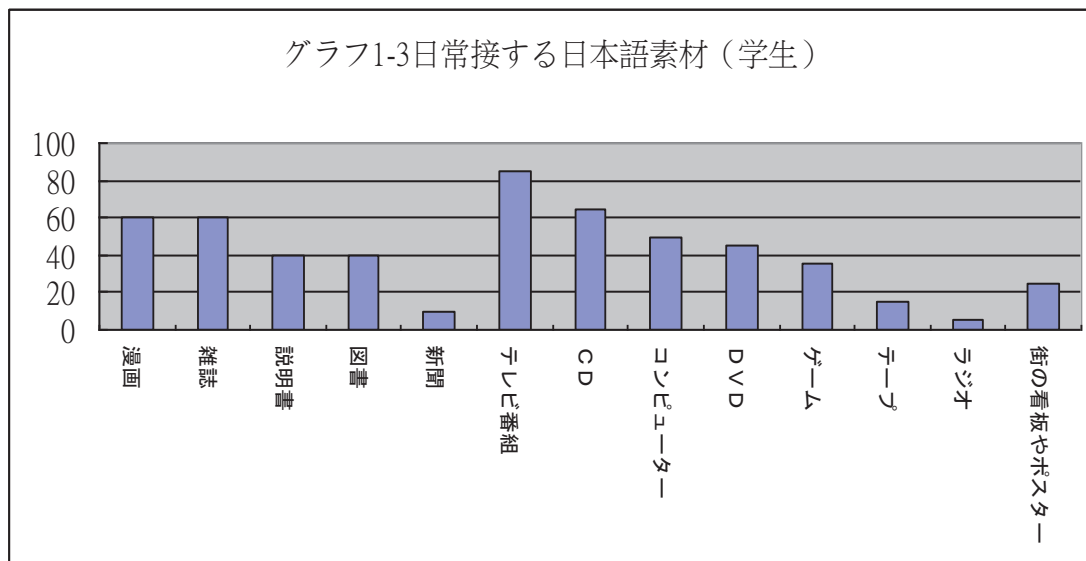
2.3 拡大し多様化する「生の日本（語）」への接触

以上の傾向を「生の日本（語）」への関心の高さと呼ぶとすれば、それと相応しているのが、学習者の「生の日本（語）」への接触の拡大と多様化である。

まず、日本でのコミュニケーションの拡大は、授業以外で日本語でコミュニケーションしたことがある学習者は 45.3%（国立国語研究所 2005：30）と約半数あり、もっともよく話す相手は日本語の先生 33.6%、同級生 27.9%に続いて知り合い 14.5%となっている。日常的に最も関わる相手である同級生とのコミュニケーションは除き、そのコミュニケーション方法を見ると、日本語の先生では面談がほぼ 100%であるのに対して、学校外の知り合いでは、インターネットのチャットが 40%、メールが 40%、電話と手紙が 20%ずつで、面談は 60%となっている（国立国語研究所 2005：31-32）。以上から、台湾の現在の学習者は、学校外の知り合いとも直接、話す機会があり、同時に、電話、チャット、メー

ルなどのメディアを利用したコミュニケーションが、そうした知り合いの場合には、多くなっていることが窺われる。学習者の直接的な日本語コミュニケーションの機会が多様化しており、同時に、その中に各種情報通信メディアが入り込んできていることに注目する必要がある。

また、「生の日本（語）」への接触が多様化している傾向は、学習者が接する日本語に関係したものととの接触で顕著になっている。学習者が学校外で日本語に関係したものと接触する割合は 93.6%（国立国語研究所 2005：37）で日常化している。授業以外に接している日本語に関係したものの中で、学生達が日本語と日本に関する情報源としているのは、「日常接する日本語素材（グラフ1-3）」⁵から分かるように、従来の印刷メディア（漫画と雑誌 60%、説明書・パッケージと図書 40%、新聞 10%）に対して、情報・通信メディア（テレビ番組 85%、CD65%、コンピュータ 50%、DVD45%、ゲーム 35%、録音テープ 15%、ラジオ 5%）に加えて、街での情報（街の看板やポスターなど 25%）となっている。



以上のような学習者が日本語や日本の情報源としているメディアについて、注目すべき点は、三つある。

第一は、分野の多様化である。大学で今まで重視してきた従来の印刷メディア（図書、雑誌、新聞）に対して、漫画や説明書・パッケージという、今までサブカルチャー扱され

⁵ 国立国語研究所（2005）38Pの表3-12から作製。

たり実用的すぎて視野に入って来なかった情報源が大きな比率を占めていることと、台湾での日本製品や日本文化受容によると思われる街の看板やポスター25%という比率の高さも、今までそれほど注目されていなかった現象と言える。第二は、メディアの交替である。マルチメディアと言われてきた分野でも、データから見ると、かつては各国の大衆文化を象徴する 20 世紀のメディアと言われた映画は、すでに学習者の視野からほぼ消えて時代の役割を終えているように見える。また、録音テープやラジオなど音声だけのメディアも情報源としての比率はかなり低下している。その一方で、コンピュータにも連動した映像メディア（テレビ番組、DVD、ゲーム）と情報通信メディア（コンピュータ）が主流になり、情報通信技術の時代的变化に学習者が大きく影響されている様子が窺える。第三に、情報の質の多様化である。従来の印刷メディア（図書、雑誌、新聞）が事実を知る上では一定の仕方でもコントロールされた情報源である⁶のに対して、漫画、テレビ番組・ゲーム・インターネット、説明書・パッケージの情報、街の看板やポスターは、事実を知るよりも娯楽を中心とするサブカルチャーの情報または極めて営業的な情報であり、情報の質、情報の信頼性という点では、まさに玉石混淆である。そして、社会で一定の権威性を持った情報と考えられる印刷メディアの図書が 40%、新聞が 10%しか利用されていない一方で、テレビ番組 85%、漫画 60%、インターネット 50%など、こうした質も正確さも混沌とした情報源の利用率は倍以上になっており、情報とメディアのリテラシーの点で、情報の信頼度、正確さ、意図などを読み取る場合、以前より、かなり混沌とした状態の中で、学習者が日本語に接するようになってきているといえる。

2.4 高まるインターネット利用比率

そうした点で注目されるのは、学習者のインターネット利用である。

日本語学習者に限った資料ではないが、台湾の大学生の学習や生活行動について調査した台湾の教育部発表の「大學生學習及生活意向調查報告」が公開され、大学生の生活実態が明らかになった。

最近、台湾で学生が学習のためにインターネットを利用する時間は、以下のグラフ 1-4 のように、学部による違いはあるが、60～80%が毎日 1～4 時間となっている。つまり、学生の約 70%がインターネットを利用しない日はないという状態で、生活に欠かせない

⁶ 新聞などのメディアの性格は、メディアリテラシーの概念の中で提起され、その内容が送り手に高度に管理されたものであることは周知のことになっている。詳しくは本論文の 4 で述べる。

部になっていると考えられる。

グラフ 1-4 大学生が学業でインターネットを使用する時間⁷



2.5 台湾の日本語学習者の学習傾向と課題

以上、見てきた日本語学習者の学習傾向と課題をまとめると以下のようになる。

- (1) 学習者の学習動機は、「生の日本（語）」に触れたいという希望が高く、そうした動機から、「生の日本（語）」に触れる機会が人やものあるいはメディアとの接触を通して日常化してきている。
- (2) 「生の日本（語）」に触れる機会としては、人の接触の面でも、学校外の知り合いとインターネットなどのメディアを利用してコミュニケーションする機会が増えている。また、ものや情報源の面でも、テレビ番組、CD、コンピュータ、DVD などコンピュータと連動したマルチメディアとサブカルチャーの漫画などが主流になっている。
- (3) 「生の日本（語）」に触れたいという動機から、学習用教材でも在来の作られたマルチメディア教材（テープ、コンピュータソフト、ゲーム）や人工的なスピーチではなく、生の接触源（日本人との接触、テレビ番組、メール、アルバイト、ホームステイなど）が重視され、メディアの場合も少しでも実際の接触に近い方法を探ろうとしている。
- (4) 人の面でも、ものや情報源の面でも、いわゆる教育的、教材的でない、質的に様々な接触源（リソース）が多くなり、学習者には、接触源（リソース）の質の善し悪しや信頼性と危険性などを見抜く、いわゆる情報リテラシーあるいはメディアリテラシーの能力が不可欠になっている。

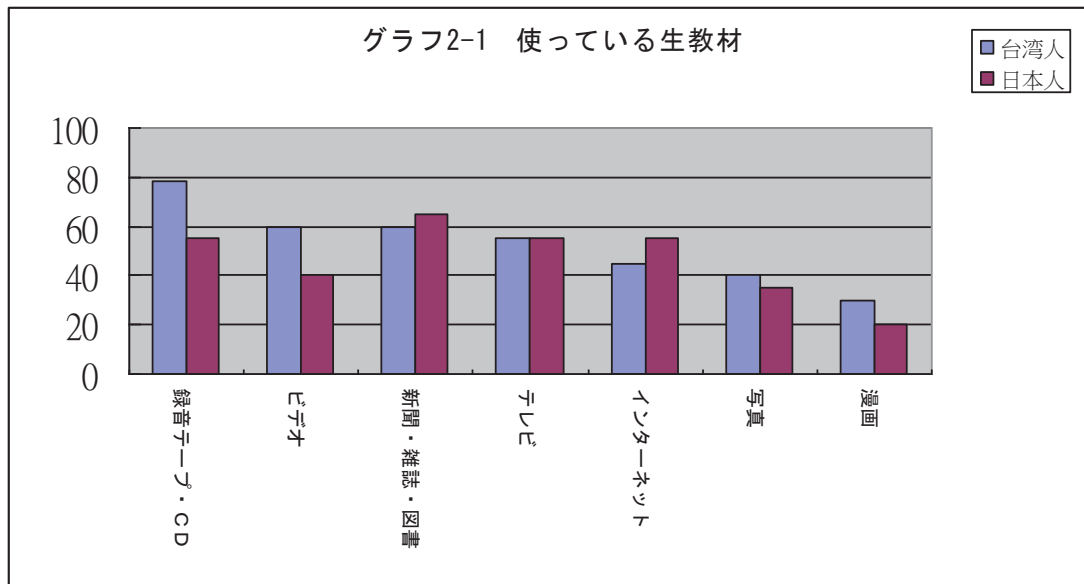
3. 教授者側の意識と課題

⁷ 教育部統計処（2004）『大學生學習及生活意向調查報告』PDF版6Pを参照。

しかし、学習者のこうした要望と変化に対して、高等教育の教授者側の対応はどうか。国立国語研究所（2005）は、以下のような調査結果を出している。

3.1 教授者の使っている教材

2 で見た学習者に興味関心の高いメディアに対して、教授者が実際にどんな生教材を使っているかを見る（グラフ 2-1）⁸。台湾人教授者の場合は、高い



順に、録音テープ・CD 78%、ビデオ・新聞・雑誌・図書が 60%、テレビ番組 55%、インターネット 45%、写真 40%、漫画 30%となっているが、日本人教授者では、書籍 67%、新聞・雑誌 63%、テレビ番組・インターネット・録音テープ・CD 55%、ビデオ 40%、写真 35%、漫画 20%となっている。教室では、確かにインターネットや漫画なども取り入れられているが、台湾人、日本人ともに教室では従来の印刷メディア（図書、新聞、雑誌）や写真、録音テープなど従来のメディアが主に使われ、学習者が関心を持っている接触源（リソース）とは、重点がずれている様子が窺える。

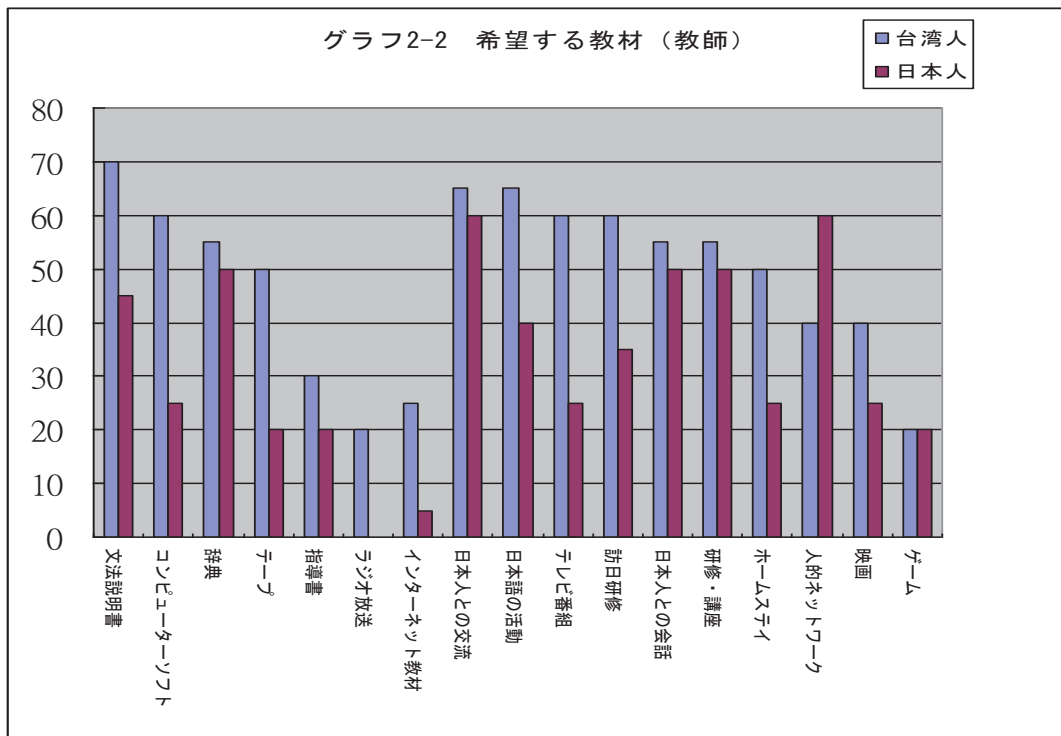
3.2 教授者の教材充実の希望

次に、調査の中から、今後の日本語教育での教材充実の方向性を示していると考え

⁸ 国立国語研究所（2005）86-88Pの資料を参照。

られる、教授者の「今後充実させて欲しい教材・素材（グラフ 2-2）」を見ると、台湾人教師の場合、学習用教材では、文法説明書 70%、コンピュータソフト 60%、辞典 55%、テープ類 50%、指導書・ラジオ放送・インターネット教材 20～30%などとなっている。一方、生教材では、日本人との交流・日本語に関係した活動 65%、日本語のテレビ番組・訪日研修 60%、日本人との会話・日本語教師養成講座・ホームステイ 50～55%、教師間のネットワーク・映画 40%など、全般に渡って充実を希望するものが多い。

他方、日本人教師では、学習用では辞典 50%、文法説明書 45%、テープ類・コンピュータソフト 20%、指導書 15%、生教材では、日本人との交流・教師の



ネットワーク 60%、日本人との会話・日本語教師養成課程 50%、日本語に関係した活動 40%であるのに対し、ホームステイ・日本語のテレビ番組・映画 20%程度で、学習者あるいは台湾人教授者の要望と食い違っている分野が目立つ。

3.3 教授者の問題点

学習者の「生の日本（語）」志向・ニーズへの理解と対応に関して、今回の調査結果から浮かんでくる教授者側の課題をあげるとすれば、二点ある。

(1) 教材への関心の持ち方のずれや不足

台湾人教師の場合は、生教材に関して興味のあるものが学習者と一致していて、その点では学習者の希望を汲み取っているが、学習用教材では、学習者がそれほど興味を持っていないコンピュータソフトを60%、テープ類を50%と、多くの教師がさらに必要と考えている点で、大きなミスマッチを起しており、学習者が望む分野や必要な部分への力の方向転換や集中に結果的に失敗しているのではないと思われる。

他方、日本人教師の場合は、自分が母国と母国語を代表しているという自信があるためか、全体的に教材や素材に充実を必要とするかどうかに対する関心が低い点にまず大きな問題があると言える。さらに、学習用教材の需要について、それほど必要を感じていない点では学習者の希望に添っているが、生教材ではミスマッチが大きく、とくに、ホームステイ、テレビ番組、映画などでは学習者の意向を正しく汲み取っておらず、対応が遅れていると考えられる。以上の資料からは、学習者の求める日本語学習教材・素材の充実の方向と、台湾人教師・日本人教師ともに教授者側の考える充実の方向との間には、かなりの落差がある実態が浮かんでくる。

(2) 学習者の接する「生の日本（語）」への配慮不足

マルチメディア化への対応が言われながら、実際に使用している生教材では印刷メディアや在来の音声メディアが主で、学習者生活の一部になっているインターネットやそれに関連した情報メディアについて、教授者の側の関心はいまだ高いとは言えず、本来、学習者をリードすべき教授者側が時代の変化に付いていない傾向が見て取れる。また、人の面でも、ものや情報源の面でも、いわゆる教育的、教材的でない、質的に様々な接触源（リソース）が多くなり、学習者が玉石混淆の様々な「生の日本（語）」の接触源（リソース）に接しているにも関わらず、教材の充実の面から見ると、教授者は、自分が管理できる教室内での印刷物での生教材や教材として作られたマルチメディアなどに主に関心が向いていて、学習者が実際に接している接触源（リソース）の質の善し悪しや信頼性と危険性など、いわゆる情報リテラシーあるいはメディアリテラシーに関する配慮が不足しかねない状態が生まれている。

3.4 台湾の日本語教育に求められている対応

学習者の学習動向に関心を持つことで、以上のような学習者と教授者の方向性に生じているミスマッチを解消し、今まで以上に、限られた人材と資源を必要なリソースや分野に集中的に投入することがより効率的な学習につながるはずである。学習者が生活の中

で接している「生の日本（語）」の主要な接触源には、学校外の知り合いと日本のものやメディアがあったが、本論では以下、特にメディアの面に限定して、学習者の学習動向に対して台湾の日本語教育に必要な対応を考えてみると、以下の二点が言えるであろう。

第一は、メディアのコンテンツへの注目である。確かに、台湾の日本語教育の授業でのインターネットやマルチメディアの活用はかなり実践され提起されているが、データ整理、インターネットによる資料集めや発信、教師の作った Call 教材などのマルチメディア教材の利用などに中心があり、いわば情報通信源であるマルチメディアの機械・装置を使っている段階と言える⁹。

しかし、学習者が実際に日常生活で接しているのは、日本のインターネットのコンテンツやチャット・掲示板、テレビ番組や音楽、漫画などであり、台湾の日本語教育の中では、学習者が受け取っているこうした情報内容の質の面ではいまだ検討には至っていないと言えるであろう。例えば、JET、緯来日本、国興で流している日本のテレビ番組は、在来印刷メディア（図書、雑誌、新聞）に比べれば、お笑いやバラエティーなどサブカルチャー的色彩の濃いものが多かったり、必要以上に誇張されたりして信頼度が低い面があり、おもしろいからと言ってそれをそのまま「事実」として受け取っていいものでもない¹⁰。また、流れている字幕が誤訳である場合も少なくない¹¹。さらに、一定の方法でコントロールされた情報

⁹ 2005年の情報通信メディアの日本語教育への応用成果として、馮寶珠（2005）「日本語CALL教育の学習効果について」『台湾日本語文学期20』、台湾日語教育学会『日語教育與日本文化研究國際學術會議論文集』の林俊成（2005）「字型認知を用いた漢字学習ソフトウェアの開発」、藤村知子・菅長理恵（2005）「CD-ROM教材『日本事情テキストバンク』の開発について」、東呉大学日文史『2005年日語教學國際會議論文集』の李漢燮（2005）「コーパスを利用した日本語・日本語教育の研究」、馮秋玉・西郡仁朗・林文賢（2005）「マルチメディア教材による日本語の有声子音・無声子音の知覚学習」、黃愛玲（2005）「自発学習支援への一試案—支援プログラムの開発とその効果を中心に—」、葉淑華（2005）「DLL應用的探討」、林文賢（2005）「e-Learningサイトの構築と運営力の養成についての一考察」、杉村泰（2005）「コーパスを利用した日本語文法教育」などが台湾の主要学会や研究会で発表されている。

¹⁰ 日本では青少年へのテレビの影響を調べる調査も行なわれてきた。郵政省『青年と放送に関する調査研究会』議事録には各国でのメディア管理が報告されている。

http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/policyreports/japanese/group/youth/youth_0.html

¹¹ たとえばフジテレビドラマ「鬼嫁日記」を2006年6月に台湾で放映中だが、字幕ではそのまま「鬼嫁」と訳している。日本語では強く怖いお嫁さんという意味なのに、台湾での「鬼嫁」は死んだ人に嫁ぐ冥婚の意味で、まったく違った意味になってしまう。異文化の理解の点で、小さな誤解が積み重なっていく可能性がある。

であるテレビ番組のドキュメンタリーやニュースをそのまま日本の現実と受け取ってしまうと、メディアの意図に操作されたことに気が付かないで、日本の一面的なイメージを増大させてしまうことになる¹²。

第二は、メディアコンテンツの積極的な授業への導入である。異文化コミュニケーションの視点から言えば、放っておけば誤解を生みやすいドラマの会話の訳語や場面は、取り上げて台湾や諸外国の習慣と比較すれば日本文化を理解する鍵になる。お笑い番組での笑いの取り方などからは、日本人の笑いと台湾人の笑いのような比較文化・社会論の観点での考察ができる。テレビ番組のドキュメンタリーやニュース、あるいはインターネットの各種資料などは、NIE（Newspaper in Education）のよい資料で、資料を相対化する視点を養うのに最適な材料になる¹³。

そこで、以下、本論文では、学習者が学校以外でのコミュニケーションの場や「生教材」として情報通信メディアの多様な情報を活用している実態に合わせて、以下の節では、こうした情報・通信メディアの利用法を考えてみたい。次の4．では、メディアのコンテンツへの注目という課題を主に取り上げる。これは、リテラシー教育の一部としてのメディアや異文化のリテラシー教育として位置づけることができるであろう。続く、5．では、新しいメディアコンテンツの積極的な授業への導入を考える。今回は、インターネットメディアの新しい形であるブログとインターネットラジオの受容と利用について考える。

4．情報やメディアに関するリテラシー教育

以下では、メディアの質に関する教育と言える、情報やメディアに関するリテラシー教育の概要を紹介し、台湾の日本語教育への応用を考える。

4.1 メディアに関するリテラシー教育の分野と内容

すでに、情報やメディアをどう扱い、どのように質を見分けるかという分野で、さまざまな教育が各国で行なわれ、さまざまな呼び方が用いられている。一般的に日本でよく用いら

¹² たとえば新聞の教育利用については、Newspaper in Education NIEとして、各国で教育利用の方法が討議されている。日本での事例と注意点は、平石敏隆「NIEで何ができるか」
<http://osaka.yomiuri.co.jp/nie/tebiki/nd50606a.htm>に詳しい手引きがある。詳しくは4で紹介する。

¹³ 各団体・新聞社のNIEはYahooカテゴリーNIE <http://dir.yahoo.co.jp/Education/Teaching/NIE/>参照。

れる用語の定義を整理すると、以下のようになる。

(1) コンピュータ・リテラシー

インターネットフリー百科事典『Wikipedia』に拠ると、以下のとおりである¹⁴。

コンピュータ・リテラシーは、コンピュータを操作して、目的とする作業をおこない、必要な情報を得ることができる知識と能力を持っていることである。コンピュータ・リテラシーは、1970 年代後半に情報機器としてのコンピュータが普及し始めた当初は、プログラム言語に関する読み書き能力を持つこと、さらにコンピュータについての技術的な専門知識を持っていることを指していた。しかし、情報化社会の急速な進展にともない、そうした専門的な知識を持つことなく、日常生活のなかでコンピュータを操作して目的を達成する能力をさすようになってきた。

これは、情報通信手段として各種メディアを使いこなせる能力として定義できる。こうした意味でのコンピュータ・リテラシー教育は、現在、普及しつつある分野で、台湾の高等教育や日本語教育でもすでに行なわれ、この分野に関しては、すでにそれほど問題ではない。台湾の日本語教育で、情報とメディアに関するリテラシー教育に関して問題になるのは、以下の部分であろう。

(2) メディア・リテラシー

インターネットフリー百科事典『Wikipedia』に拠ると以下のとおりである¹⁵。

メディア・リテラシーとは、情報メディアを批判的に読み解いて、必要な情報を引き出し、その真偽を見抜き、活用する能力のこと。「情報を評価・識別する能力」とも言える。メディア・リテラシーで取り扱われるメディアには、公的機関や「マスメディア」（新聞、テレビ番組、ラジオ、映画、音楽、出版業界など、および広告）から、インターネットまでも含まれる。メディアの情報が何を目的にしているかを読み取ることができれば、それに踊らされることなく、その情報を利用することが可能になると考えられる。

1980 年代後半からは、メディア・リテラシーを学校教育に取り入れることも少しずつ行われるようになってきた。カナダ・英国およびオーストラリアでは、カリキュラムに取り

¹⁴ <http://ja.wikipedia.org/wiki/「コンピュータ・リテラシー」>参照。なお、このサイトでは、多くの参加者がそれぞれの専門知識を持ち寄って討論し、最新の内容を決めており、変化の速い分野では信頼度が高いので、ここでの定義を用いる。

¹⁵ <http://ja.wikipedia.org/wiki/「メディア・リテラシー」>参照。

入れるよう国の政府が指定している。アメリカ合衆国での扱いは、州によって異なる。アメリカ合衆国以外では、メディア・リテラシーが単に「メディア教育」と呼ばれることも多い¹⁶。

情報の質という価値観に関わる問題だけに立場はさまざまだが、日本では2000年に当時の郵政省が『放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会報告書』を出している¹⁷。それによれば、メディア・リテラシーの構成要素を、メディアを主体的に読み解く能力、メディアにアクセスし、活用する能力、メディアを通じてコミュニケーションを創造する能力、特に情報の読み手との相互作用的コミュニケーション能力の3つに整理している。

また、研究では、郵政省の定義した「メディアを主体的に読み解く能力」に関して、鈴木みどりなどの業績が知られている¹⁸。最近は考え方の違いから分裂してしまったが、その流れを受けた市民活動も、一時はかなり広がり、インターネットでは「授業づくりネットワーク」のメディアリテラシー教育研究会¹⁹、F C Tメディアリテラシー研究所²⁰には、学校教育での実践例や実際のテレビ番組やニュースでの実例が紹介されている。鈴木みどりによれば、メディアはすべて構成されており、「現実」を構成している。それを、視聴者が解釈して意味をつくりだしている。その意味としては、メディアでは商業的意味、ものの考え方（イデオロギー）や価値観、社会的、政治的意味の伝達が行なわれており、それらをメディアは独自の様式、芸術性、技法、きまりで伝えており、クリティカルにメディアを読むことは、創

¹⁶ 日本の学校教育や日本語教育現場では、こうした情報利用をコンピュータに限らず行う場合には、情報リテラシーという言い方も行なわれている。この場合には、コンピュータ、ネットワーク、携帯電話などの情報機器を使いこなすコンピュータ・リテラシーと、従来の印刷物のメディア、およびテレビ、ラジオ、映画音楽など視覚聴覚メディアを使いこなす能力（メディア・リテラシー）と言われる。また、「情報を処理する能力」や「情報を発信する能力」をメディア・リテラシーと呼んでいる場合も多い。しかし、これらは情報の質を見分ける意味ではなく、情報源を使いこなす意味での第一の「コンピュータ・リテラシー」と同義と考えたほうがよい。

¹⁷ 総務省『放送分野における青少年とメディア・リテラシーに関する調査研究会報告書』
http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/pressrelease/japanese/housou/000831j702.html

¹⁸ 鈴木みどり（2004）『Syudy Guideメディア・リテラシー 入門編（新版）』リベルタ書房などを参照。

¹⁹ <http://media.jugyo.jp/>

²⁰ <http://www.mlpij.org/>

造性を高め、多様な形態でコミュニケーションをつくりだすことへとつながる²¹。

こうしたメディア・リテラシーの研究は、新聞の分野では NIE (Newspapers in Education) として既に各国で行われており、日本で NIE 研究会を組織している平石隆敏は、以下のように、メディアの伝える内容を批判的に捉える必要性を訴えている²²。

純粋に客観的な報道というものは存在せず、多かれ少なかれ、すべての報道は発信者によって再構成された一つの現実である。どのような出来事に報道する値打ちや意義を見てとるか、そしてその出来事をどのように切り取るか、そこにはつねに発信者の視点や解釈がつきまといっている。

筆者は授業で新聞の見出しについて、次のような例を取りあげた。2003 年 7 月 1 日からのタバコ値上げに際して、ある企業が喫煙者に意識調査をおこなった結果、「たばこをやめる」12.3%、「本数を減らす」35.8%、「今まで通り吸う」51.8%であった。さてこれを記事にすると、どんな見出しをつけたらよいだろうか。実際の見出し(2003 年 6 月 28 日)には大きな違いが見られ、朝日新聞は「たばこ値上げ後も、5 割『今まで通り吸う』」であったのに対し、共同通信社は「たばこ 7 月 1 日から値上げ、半数が『やめる・へらす』」とした。二つは正反対の印象を与えるが、どちらも同じ数字をもとにしている。そこにあるのは、数字を解釈する問題意識の相違なのである。

このことは見出しや記事の内容だけでなく、客観的に思える写真についても同様である。これも福田徹氏が紹介している例だが、2004 年 3 月 15 日におこなわれたオリンピック落選に関する高橋尚子の記者会見を伝える記事に添えられた各社の写真は微妙に異なっている。毎日新聞は明るい表情の写真、読売新聞は再出発を誓うような表情の写真、産経新聞は目が潤んでいるような写真、朝日新聞は答えに困っているような写真であった。各社は、多数の写真の中から記者会見の様子を伝えるのもっともふさわしいと判断したものとして、それぞれの写真を選んだのである。

日本では、このようなメディア・リテラシーを学校教育の現場に取り入れる必要性が訴えられて、多くの実践例が出されている。台湾の日本語教育では、生教材としてテレビ番組や新聞などを多く使ってきたが、今後は、その使用においてメディア・リテラシーの視点を生かすことによって、単に日本語学習や社会文化的知識の教材とするばかりではなく、批判

²¹ <http://www.mlpj.org/km/index.shtml>

²² <http://osaka.yomiuri.co.jp/nie/tebiki/nd50606b.htm>

的相対的に情報を捉え価値を判断する高等教育にふさわしいこうした内容を日本語学習に自然に取り入れることができる。

（３）情報教育

日本の文部科学省が提唱する、情報を扱う能力を高めることによって、学習者が情報社会の中で主体性や創造性を発揮できるようになることを目的とする教育である²³。文部科学省によれば、情報活用能力には、「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の３つの要素がある。

まず、情報活用の実践力とは、「課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力」の育成であり、課題や目的に合った情報手段（情報メディア、コンピュータ、ネットワーク）の適切な利用、必要な情報の選択、課題解決における主体的な情報活用（収集・表現・創造・発信・交流）情報の表現とコミュニケーションなどが含まれる。

次に、情報の科学的な理解とは、「情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解」の育成で、情報手段の仕組みや特性の理解には、問題解決の手順と結果の評価についての基礎的な理論や方法、人間の知覚、記憶、思考についての特性に関する基礎的な理論と方法、情報を表現する技法に関する基礎的な理論と方法などを修得する。具体的には、情報の表現法、情報処理の方法、統計的見方・考え方やモデル化の方法、シミュレーション手法、人間の認知的特性、身近な情報技術の仕組み、代表的な情報手段の機能や特性などの理解である。

最後に、情報社会に参画する態度としては、「社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度」の育成を目指している。内容は、情報社会についての理解、情報モラル・情報発信の責任についての理解、情報社会に積極的に参加し、よりよい社会にするために貢献しようとする態度を身につける。理解内容としては、情報技術と生活や産業、コンピュータに依存した社会の問題点、情

²³ 文部科学省「情報教育の実践と学校の情報化—新「情報教育に関する手引き」—」に拠る。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/020706.htm

報モラル・マナー、プライバシー、著作権、コンピュータ犯罪、コンピュータセキュリティ、マスメディアの社会への影響などがある。

日本の文部科学省が行っている、小・中・高校での情報化への対応では、各種の試みが紹介されているが²⁴、こうした内容は広範囲にわたっており、その全てを日本語教育単独で扱うのは難しい。しかし、会話や作文などの教室活動の中に、特に各種メディアとコミュニケーション能力に関係した視点を取り入れることは、日本語教育の内容を豊かにすると思われる。たとえば、日本の紹介をする場合、課題や目的に合った情報手段（図書、新聞、インターネット）と情報の選択として、図書、新聞、雑誌、インターネットで内容を比較させたうえで、どれを利用するかを選択させるなどして、課題解決における主体的な情報活用と表現を行うなどの活動は可能であろう。

5.2 異文化に関する教育の一環として

次に、視点を改めて、学習者が接する「生の日本（語）」の情報源であるメディアに関し、異文化の点から見ることにする。

（１）異文化コミュニケーションの視点

近年の日本語教育では、異文化コミュニケーションが大切な視点の一つになっている。石井敏・久米昭元（2005）は異文化コミュニケーションについて、以下のように述べている。

異文化コミュニケーションとは、「言語や思考、価値観など文化的背景鋸となる人々の間で行なわれる多様なコミュニケーション現象」のことであり、それらを研究することが異文化コミュニケーション研究である。そのなかには人々の間のコミュニケーションにいかなる文化的要因が関与しているかを吟味すること、また、そのようなコミュニケーションでしなしば起きる誤解や摩擦の要因を解明することなども含まれる（石井敏・久米昭元 2005：2）。

こうした観点から見ると、学習者が日常的に接している日本のメディアなどの情報源は、豊富な異文化コミュニケーション研究の視点を提供している。たとえば、異文化コミュニケーションの中では、「メディア分析」が行なわれてきた。先にあげたメディアに構成された情報を読み解くメディア・リテラシーと関連するが、石井敏・久米昭元（2005：150-158）では、二つの国のメディアで同じニュースがどのように報道されるかを比較する文化比較研究、あ

²⁴ 文部科学省「小・中・高教育・情報化への対応」

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/main18_a2.htm

る国のメディアで特徴的に用いられることばや映像の特性を調べる単独メディア研究、海外メディアの日本報報道の傾向を見出そうとする対日イメージ研究が紹介されている。

こうした論点を生かして、アニメ分析の例として、スーザン・J・ネイピア(2002)、大塚英志(2004)などがすでに出ており、日本語会話や作文の時間に、台湾で流れている日本のアニメ、歌、ドラマなどから読み取れる文化的特徴を読み取って、討論し整理するなどの活動が可能である。おもしろい娯楽の対象であったテレビ番組を、日本語教育の素材として生かしながら異文化コミュニケーションの問題として多面的に捉えることができ、学習者の受け身の「生の日本（語）」との接触を、能動的主体的な場に変えることができるであろう。

（２）異文化リテラシーの視点

J.V.ネウストプニー(2002)は、言語を社会文化行動の鏡と捉えて、異文化コミュニケーション教育を、社会文化行動のインターアクション教育と定義し、文法能力、文法外コミュニケーション、社会文化行動の三つのプロセスを区別する必要を説いた。そして、こうした社会文化行動のインターアクション能力を身につけるために、日本語教育の場では、学習者と日本の社会文化行動との共通点を見出す、日本社会の中のバリエーションを目立たせる、日本人論や日本文化のステレオタイプに反対する、日本を美化する傾向を否定するなどの注意点をあげている（J.V.ネウストプニー2002：10-11）。

また、西口光一(2005)は、学習行動をこうした社会文化的パースペクティブから捉える各種のアプローチを報告している。こうした考え方は異文化に関する理解と運用の能力としては異文化リテラシー、観点としては、社会文化的パースペクティブと呼ばれ、日本事情の内容や学習行動の理解に大きな変化をもたらした。名嶋義直（2006）は、こうした日本の社会文化行動のインターアクション教育の方法について、多くの国からの学習者が一緒に学んでいる教室を利用し、各国民間での差異に気づかせ容認させるコミュニケーションをとおして、固定観念、価値観、カテゴリー化、非言語行動に気づかせるなどの課題を設けた授業を報告している。

台湾の日本語教育の現場でも、同じ視点を生かし、たとえば、日本のドラマを見て、日本でのドラマの評価と自分と同級生の評価を比べさせるなどによって、日本文化と台湾文化とを相対化し、違う価値観を互いに容認する異文化リテラシーを養成することが可能である。

以上、現在、日本で行なわれている情報とメディアに関するリテラシー教育の動向と、

台湾の日本語教育の環境へ導入するアイデアを提示した。最後に、こうした情報とメディアに関するリテラシー教育の視点を生かしながら、新しいインターネット・メディアであるブログ（BLOG）とインターネットラジオを日本語会話授業に取り入れるアイデアを提案する。

6. 新メディアを積極的に利用した教室活動

情報通信技術の進歩は早く、新しいメディアへの対応は、日本語教育の課題である。学習者の要望が高い、生教材としての日本語に接する、あるいは、直接、日本人や日本の生活にふれるという観点で、注目されるインターネットの新しいコンテンツは、身近なところで、以下にあげるブログとインターネットラジオがある。

台湾での日本語学習に、こうした流れを取り入れることは、台湾の日本語学習者に、従来のマルチメディアから一歩進んだ、もう一つ身近な日本語への道を開くことになるであろう。そこで、以下では、最近のインターネットで新しい主流を作りつつあると見られるコンテンツを紹介し、それを日本語会話教育、音声教育に生かすアイデアを提案する。

6.1 ブログの特徴

アメリカではすでに数十万のサイトがあると言われるが、日本ではこの2～3年、急速に無料のブログサーバーが普及し、従来のホームページに替わって、一般市民に広く受け入れられるようになってきている。台湾でも、yahoo などに開設されている²⁵。

ブログとは、「IT用語辞典」によれば以下のようなウェブサイトである²⁶。

ブログ：BLOG（WEB＋LOG）

個人や数人のグループで運営され、日々更新される日記的な Web サイトの総称。内容としては時事ニュースや専門的トピックスに関して自らの専門や立場に根ざした分析や意見を表明したり、他のサイトの著者と議論したりする形式が多く、従来からある単なる日記サイト（著者の行動記録や身辺雑記）とは区別されることが多い。

以上のように、とりとめのない個人の日記や感想を述べたサイトから、ブログの普及によ

²⁵ Yahoo奇摩部落格<http://tw.blog.yahoo.com/>、PCHOME部落格<http://myblog.pchome.com.tw/>、中時部落格<http://blog.chinatimes.com/>など、かなりの数のサーバーが開設されている。

²⁶「IT用語辞典」<http://e-words.jp/w/E38396E383ADE382B0.html>の解説を要約。

って、時事ニュース、海外、医療、経済など専門的なトピックに分化して、個人の仕事やかなり凝った趣味の紹介が行なわれるようになった。いわゆるスターが、個人の活動を紹介する目的で公開したブログや、マスコミ人が実名・匿名で論評を出すブログや、編集や出版のプロが読書紹介をしたりするブログなど、専門的话题に特化した各種のブログが個人によって出されている。

以下に、いくつかを紹介する。

- ①「有名人ブログ集」：芸能人など有名人のブログを集めたリンク集
<http://www.uiui.net/~klaxon/celeb/>
- ②「松岡正剛・千夜千冊」：帝塚山学院大学教授・松岡正剛の読書案内
<http://www.isis.ne.jp/mnn/senya/senya.html>
- ③「ブログ大賞」：エントリーした各年度の人気ブログを投票で選んでいる。
<http://www.blogaward.jp/2006/>
- ④「アルク・ブログ」：語学学校のアルクが開設したブログ <http://blog.alc.co.jp/>
- ⑤「在外日本人ネットワーク」：海外で暮らす日本人のブログを紹介 <http://zaigaij.net/>
- ⑥「バグダッド日記」：イラク戦争を報道した有名な個人のサイト
http://dear_raed.blogspot.com/

以上のように、有名人から一市民まで、ブログの世界では、現実世界とは違い、みな平等に自由に自分の関心を語ることが出来る。読者が多いかどうかは、面白さ、充実度という点が鍵になっている。その点では、個人の専門性や蘊蓄の深さが問われ、それがブログの特性にもなっている。

また、ブログには、今までのHTMLによる、いわゆるホームページとは違った、編集や通信を簡単に行う機能が自動的にサービスとして付いている。

(1) さまざまな編集・リンク機能がサーバーに付いている

ブログのサーバーには、ホームページを管理するCMS(コンテンツマネジメントシステム)として、ページの自動生成をする機能があり、今までのように編集用ソフトを自分で購入して手間のかかるデザインやリンクを自分でせずに、サーバーの側が決まったレイアウトで自動的に新しいページを作りだしてくれるので、誰でも新しい内容を書き入れれば、自分のページができる。また、関連のある他のサイトの記事に対して自分の記事をリンクさせる連携機能(トラックバック)や、書かれている記事に自由に意見を書き入れられるコメント機能などを備えているので、今までホームページでは、自分で設定していた、コミュニケーション機能を全く気にせずに、使用できる。

(2) 専門性がある

ブログでは個人の行動よりも、世相や時事問題、専門的话题に関しての独自の情報や見解を掲載するという形式が主流となっている。また、ネット上で独自に見つけた面白いもの、変なもの、スクープなどを紹介し、そこにリンクを張って論評したり、街で見つけた話題を紹介するという記事も多い。大きな事件や事故が起こった際に、地元の人や関係者、目撃者などが自分のブログに知っている情報を掲載することで、メディアを介さずに「生の」情報が流通するという事例も見られる。

(3) コミュニティー性がある

多くのブログには読者が記事にコメントを投稿して掲載できる掲示板的な機能が用意されている。また、別のブログの関連記事へリンクして相手の記事に自分の記事への逆リンクを掲載する「トラックバック」という機能もあり、興味や話題ごとに著者同士や著者と読者によるコミュニティが形成されている。さらに、RSS、Atom など、更新を自動的に通知する機能があるので、興味のある相手は、新しい内容をすぐに知り、応答することができる。

また、最近では、ブログによる「口コミ」で情報が広がり、マスメディアが後追いでそのトピックを取り上げるといった現象も起きている。たとえば、2005 年日本で話題になった、インターネット掲示板 2ch から生まれたオタク男性のラブストーリー「電車男」も、以下のようなホームページでの、掲示板の記録の保存や、

<http://www.geocities.co.jp/Milkyway-Aquarius/7075/trainman.html>

以下のような、ブログでの、追跡が行なわれて、

<http://2ch-library.com/male/train/>

次第に輪が広がって、既成のマスメディアの注目するところになり、ドラマ、映画、小説などが誕生し、以下のような一連の図書での評論や異本まで現れた。

http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4796645306/Lvdrfree-22/249-8385660-8529906?dev-t=D1KDF7Q74DD3A2%26camp=2025%26link_code=xml

2

ブログは、ホームページ時代よりも多くの書き手を呼び込んで、コンテンツの充実を図っており、同時に、従来のメディアをインターネットに取り込む、一つの突破口になっている。

6.2 ブログを生かした日本語授業

以下の表に示したように、ブログには、メールや掲示板と違って、その国の言語さえ知っていれば国外の人間でも国内の人間と、かなり深くコミュニケーションできる場となる可能性

があると思われる。

台湾の高等教育での日本語教育で学習者にインターネットの基本コンテンツの利用を勧める場合の長所と短所を以下に整理した。

表 1 インターネットの基本コンテンツの特徴

	長所	短所
電子メール（密室・単発型）	①メール以外でも互いによく知っている間柄ならば、プライベートな話題に向いている。 ②手紙を書く感覚で利用できる。 ③原則として、当人同士以外には情報が見えない。	①未知の人にはメールを出すきっかけがみにくい。 ②やりとりが長続きしない。 ③コミュニケーションギャップが起りやすい。 ④知らない相手に、何を書くか迷いやすく、安全の問題も生じやすい。
掲示板（開放・単発型）	①掲示板の管理者・参加者の考えに共鳴できれば、参加しやすい。 ②会話の感じで、短いやりとりをテンポよく続けられる。 ③リアルタイムに会話をする感覚で、ノリを楽しんで利用できる。	①管理者・参加者と考えが違う場合、攻撃的となり、非常に不愉快な思いをする。 ②ほぼ一文、一文のやり取りとなるので、背景説明や理由の説明ができず、コミュニケーションギャップを生み出しやすい。 ③違う立場で意見を交換するには、向いていない。
ホームページ（密室・長文型）	①自分で自由に設定や設計ができる。 ②自分で設定しない限り、コミュニケーション機能がないので、自分だけの世界を表現しやすい。 ③自分だけのペースでじっくり書くことができる。 ④文章力が必要だが、マイペースで作成できるので、日本語の訓練に向いている。	①更新に手間がかかり、編集ソフトも自前で揃える必要がある。デザインは簡単ではない。 ②閉鎖的になりやすく、検索エンジンに登録されていないと、誰も読まない。 ③議論はメールに頼るため、意見の交換がしにくく、対立した意見では感情的になりやすい。また、コミュニティもできにくい。
ブログ（開放・	①短い文章でも長い文章でも公開し	①サーバーに負荷がかかると、サーバーが反

長文型)	やすく、また、自分の興味ある話題を説明しやすい。 ②じっくり書くことができ、また、相手の意見をじっくり読んで、感想や反論を書くことができる。 ③専門が細かく分かれる傾向にあるので、自分と好みの似た人や立場の近い人を探しやすい。 ④文章力が必要だが、マイペースで作成できるので、日本語の訓練に向いている。 ⑤RSS など、更新が通知されるので、RSS サイトを見て、興味を持つ人に読んでもらいやすい。 ⑥写真や音声を添付しやすく、音声ブログも始まっている。	応しなくなり、書いた内容が消えてしまう。 ②長文の文章も多いので、読むのに時間がかかる。 ③感想を言ったり意見の交換はできるが、掲示板のように、リアルタイムの会話を楽しむのには、向かない。
------	---	---

以上のような長所・短所を踏まえた上で、学習者に利用を勧めるとすれば、コミュニケーションに慣れ、また、日本語の練習にと言う意味で最初は、比較的、マイペースで書き始められる日本の無料ブログの読者になったり開設から始めるのは、今のインターネット・コンテンツの流れから考えても合理的と思われる。そこを拠点にして、訪問者とやり取りを交わす、次の段階として、訪問者のブログなどを訪問して、トラックバックや書き込みをするというような、段階的な利用が考えられる。その後、慣れてくれば、ブログで知り合った人とメールを交わす、あるいは、掲示板を紹介してもらい、掲示板でのやり取りをするという、さらに難しいインターネットでのコミュニケーションに取り組むことができる。

特に、誰でも編集を気にせずに作製や書き込みができるのは、日本語学習者にも負担が少ないと考えられ、レンタルサーバーや学校のブログサーバーで自分の日本語作品を公開して、読んだり批評してもらおうというような利用法もあり、また、自分の興味のある日本関係の情報をトラックバックしてもらったり、逆に、台湾の紹介を日本語で書いて、日本人からコメントをもらったりするなどの利用法が考えられる。

また、時事問題を論じたブログの様々な意見によって、新聞報道を読んで、メディア・リテラシーの教材にしたり、ブログに書き込むことで多様な意見・価値観の存在を知り、異文化コミュニケーションの場としても、当然、利用できる。

三四年生での日本語会話（三）（四）、三年生での日文習作（二）での指導計画案として、95 学年度、以下のような内容を構想中である。作製は、個人での作製の負担が大きいかもしれないと考え、グループでの作製を念頭においている。なお、1 学期間約 15 回の授業のうち、その三分の一程度を利用する計画で 6 回の指導を考えた。

第 1 回目：インターネット利用経験の話し合い

インターネット利用経験やネットでのマナーや注意点を話し合う。次に、日本のブログを紹介し、興味のあるテーマを話し合い、自分達でブログを作る構想を立てる。

第 2 回目：学生の興味で見つけたブログ紹介

学生が興味を持ったブログを紹介し、コンテンツに対するメディアと異文化リテラシーの観点で、特徴や長所と短所を指摘しながら、相互に意見を交換する。たとえば、日本での台湾紹介などからは、日本人の台湾観がわかり、実生活とのずれから異文化コミュニケーションを考えることができる。

第 3 回目：メディアと異文化リテラシーの分析

台湾で放送されているドラマやアニメを視聴し、今度は日本のブログに書かれているの意見と、自分達の意見とを相互に比較して、異文化や価値観の差異について話し合う。

第 4 回目：グループでのブログ作製

興味あるブログテーマとコンテンツを話し合っ、分担を決めてコンテンツを作成する。

第 5 回目：作成したブログの紹介と批評

自分達の作成したブログを比べ、批評し、改善点などを話し合う。また、同じテーマの日本のブログと比較し、個性や独自性をどう出すかを考える。

ブログは、教師が開設して、そこに学生が投稿する形にしてもいいであろう。その後、一定の期間をおいて、書き込みなどへの応答やトラックバックをもらったあとで、

第 6 回目：反響の紹介と討論

ブログへの書き込みや自分からトラックバックした経験を話し合う。不快な点やよかった点などコミュニケーションで起こった問題から、メディアのモラルと異文化コミュニケーションを考える。

無料サーバーの紹介については、参考として、以下を参照されたい。

「人気無料ブログ比較・評価 おすすめ編」<http://weblog.seo-search.com/osusume.html>

「無料ブログ比較・評価」<http://tada-blog.seesaa.net/>

なお、注意点について、論者のインターネットでの個人的経験から言えば、まず、台湾や日本あるいは中国関連の政治的問題への発言は、中華人民共和国公安関係者や留学生などからの圧力や嫌がらせ、台湾や日本国内での政治的見解の相違から来る悪質な攻撃などがあり、感情的批判を避ける表現にはかなりの神経を使うので、学習者は避けたほうがよいであろう。テーマとしては、入りやすい、娯楽やアニメ、ドラマなどの話題や、日本や台湾の社会や文化、流行、生活習慣、地域情報などの話題を選ぶと好い。

また、安全に関わるので、個人や学校を特定されないように、不特定多数に対して具体的個人情報を絶対に出さないのが、インターネット利用の大前提であることは言うまでもない。特に学校のメールアドレスを絶対に公開しない、個人名、個人写真、校名、居住地を出さないなどの、基本的マナーを忘れてはならない。さらに当然、詐欺、アダルト、暴力などの要注意コンテンツなどへも接触する可能性があるので、そうした警戒心も必要である。

6.3 インターネットラジオの利用

日本語でのインターネットで、もう一つ、最近の注目すべき動向は、音声化の動きである。おそらくこうした動きは、今後、動画にも拡大すると思われるが、今のところは、インターネットで音声によるラジオ放送が無料で流されるようになってきたことに、注目すべきであろう。

インターネットラジオの情報を集めている『ポッドキャストナウ』は雑誌「AERA」の記事を紹介して、従来のメディアが、インターネットラジオに参入しようとしている様子を宣伝している

²⁷。

雑誌「AERA」が、2005 年 4 月 18 日に、以下のような記事を出している。「ラジオネットラジオの大波は来るか～ニッポン放送買収どころではない? オールドメディアが化ける可能性」

・地盤沈下するラジオ業界

²⁷ 「雑誌「AERA」のネットラジオに関する記事」『ポッドキャストナウ』

<http://podcastnow.net/blog/archives/000169.html>から引用。

－ 昨年のラジオ広告費は 1795 億円（電通調査）と 5 年前に比べ約 300 億円減少

－ 首都圏でラジオを聞くひとの割合は、10 年前は 1 日平均 8%を超えていたのが、最近では 7%前半。とりわけ 10 代は 1%まで落ち込んでいる

・欧米ではネットラジオが好調

－ アメリカの昨年のネットラジオの広告費は 3500 万ドル。常連のリスナーも増加傾向

－ 欧米では日本と違って、ネット上で音楽放送する際に許諾が必要になる「著作権隣接権」がなかったり、法制度が整っているのでラジオ局としてもネット配信に参入しやすい

・広がる音声版ブログ

－ ポッドキャストという配信方法が、アメリカを中心に流行

－ 英 BBC はトークラジオ番組などをポッドキャストで配信開始

－ 米大手ラジオネットワーク「クリアチャンネル」は今夏をめどに朝の番組をポッドキャストで配信

－ ポッドキャストを開始した Seesaa ブログ担当者「ブログが出版メディアを脅かす存在になったように、個人がどんどん参入していくことで、古いと思われていたラジオというメディアが活気づくかもしれない」

・日本での動向

－ ラジオ NIKKEI は早くからネット上でのラジオ配信に取り組み、一日平均 5 万程度のサイトアクセスだったのが、昨年は 23 万アクセスまで急増

－ 今月、地域のコミュニティ FM が共同で、番組をネット配信する「サイマルラジオ」を立ち上げ。そのうちのひとの湘南ビーチ FM を経営するニュースキャスター・木村太郎さんは音楽を流すための著作権隣接権の問題をクリアにするための実験を行っている

－ ニッポン放送の「オールナイトニッポンスーパー！」ではネットでラジオを配信しているが、著作権隣接権や地方ラジオ局との兼ね合いで、一日 3 時間の放送にとどまっている。ネット放送を本格的にはじめるにはまだまだ課題が多いと関係者は指摘。

以上のように、欧米では、従来のラジオ局がすでにインターネットラジオに参入し、放送を始め、日本でも、著作権の課題が残るものの、文字と画像の一方方向性的世界だったインターネットに、音声化の動きが広がりつつある。2006 年 4 月からは、読売新聞もポッドキャスト

ストのサービスを始めた²⁸。

こうした動きの点火剤になったのは、M P 3 プレーヤーとして出た APPLE 社の「iPod」と、それにポッドキャストという技術でインターネットから音楽などを供給するメディアソフト「iTune」の登場であろう。

2006 年 6 月現在、APPLE 社の「iPod」のページにある、メディアソフト「iTune」の紹介には、以下のアドレスでポッドキャストについて、紹介されている。

「iPod」<http://www.apple.com/jp/podcasting/>

音楽を聞くために、インターネット上の有料音楽サイトから曲を買う目的で使われていたが、その技術で、M P 3 ファイルを検索できるため、ラジオなどのコンテンツにも利用が広がっている。今では、インターネットフリー百科辞典『Wikipedia』にも、すでにポッドキャストの紹介が出ている²⁹。

ポッドキャスト（英表記:Podcasting）とは、インターネット上で音声データファイルを公開する方法の 1 つである。オーディオのウェブログ（ブログ）としての位置付けが成されている。

Web サーバ上にアップロードされたその音声データファイルのリンクアドレスは、ウェブログなどの RSS 内に関連付けられる。その RSS からその音声ファイルのリンクアドレスを抽出することで、様々なソフトウェアやウェブサイト上にてその音声データを読み取り、ダウンロード保存や再生することが可能な技術である。音声データファイルは MPEG Audio Layer3(MP3)を使用するのが一般的である（2005 年 5 月現在）。

ポッドキャストは、米国アップルコンピュータ社のポータブルオーディオプレーヤーである iPod（アイポッド）と、“放送”を意味する broadcasting（ブロードキャスト）を組み合わせた造語である。iPod などの携帯プレーヤーに音声データファイルを保存して聴く事が可能な放送（配信）番組という意味合いから名付けられるものとなった。実際は MP3 オーディオファイルが扱われるため、iPod 以外にも MP3 オーディオファイルを保存して再生できるあらゆるプレーヤーでこのポッドキャストを聴く事ができる。

ポッドキャスト（英表記:Podcast）は、ほぼ同義語であるが、ポッドキャストが英語上の進行形で表現されているため、実際にそれを行うことを指し、ポッドキ

²⁸ 読売新聞のポッドキャストサービスhttp://podcast.yomiuri.co.jp/video_news/

²⁹ <http://ja.wikipedia.org/wiki/「ポッドキャスト」>を参照。

キャストはそのもの自体を指すことが多い。ポッドキャスター(Podcaster)は、一般的にそのポッドキャストを放送（配信）している人物を指す。

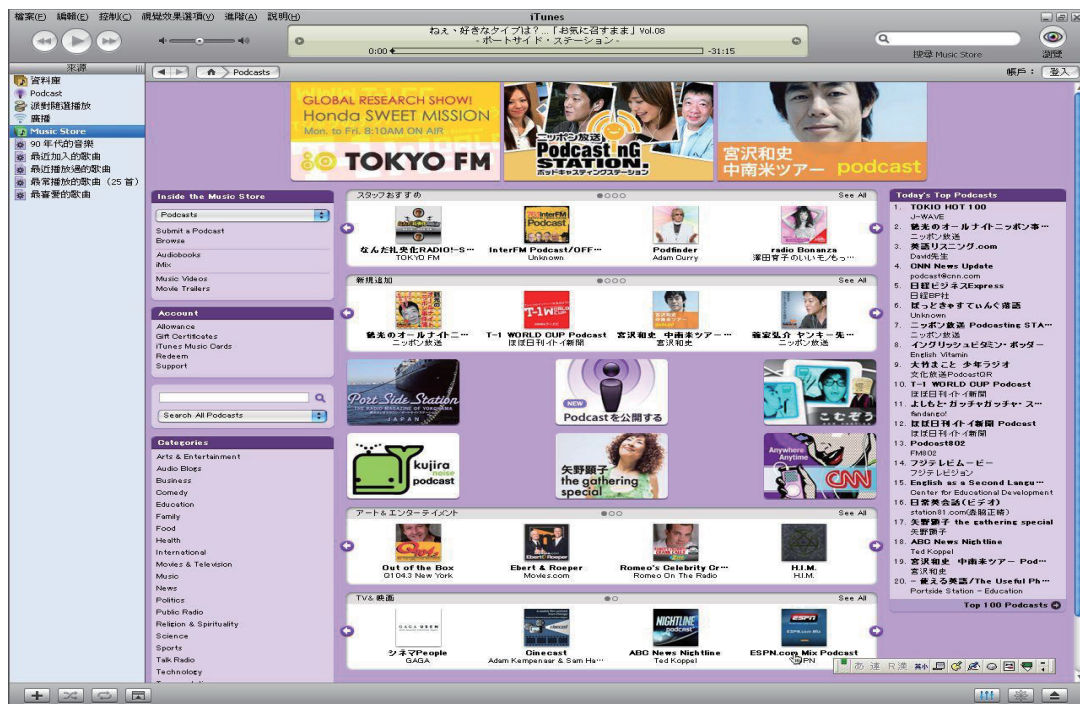
名称の由来がアップルコンピュータ社の iPod に関係しているため、ポッドキャスティングは iPod を使用しなければ聴く事が出来ないという誤解を招き易く、ビジネス的不公平感を排除しようとする議論もある。名称の代替案としてはブログキャスティング(blogcasting)などが挙げられる。

先に紹介したブログでも使われている RSS などの通知技術が、音声ファイルの通知としてラジオにも応用されて、日本でも、各種のインターネットラジオ局がブログを利用して開設されるようになっている。従来のラジオ企業ばかりではなく、個人や地域の局も開設されつつある。

写真 1 のように、「iTune」の Music Store 内にある、Podcast を見ると、英語の放送と並んで、各種の日本語放送も試験的ながら、聞けるようになっている。その他のソフトでも利用可能だが、「iTune」を利用すれば、初心者でも簡単に日本のラジオ放送が楽しめるので、その使い方を紹介する。

- ① Apple 社のダウンロードページから、「iTunes」をダウンロードして、Setup する。
<http://www.apple.com/jp/itunes/download/>
- ② Setup し、「iTunes」を立ち上げると、「Music Store」が示されるので、最下部の地域の選択バーの中から「Japan」を選択して、日本の音楽紹介の画面を出す。
- ③ 左欄にある「Podcasts」をクリック、ラジオ関係情報を表示させる。
- ④ 聞きたい局をクリックすると、Podcast コンテンツが表示される。
- ⑤ Subscribe ボタンを押して、承認すると、Podcast 一覧画面に移り、コンテンツが自動でコピーされ、終われば、再生される。
- ⑥ 再生されないときは、設定を確認。

写真 1 Apple 社メディアソフト「iTunes」の日本関係「Podcast」の画面



インターネットラジオの、日本語教育への応用を考えたとき、まず大事な
はその教材の質である。インターネットラジオの音質はMP3で提供され、FM放送並
みで、かなり聞きやすく、聞き取り教材として使うのに十分な質を備えている。音楽や声の表
情もラジオ受信機の場合と変わらないと言える。

また、ラジオアナウンサーは、テレビアナウンサーやタレントと違って話し
のベテランも多く、テレビアナウンサーよりも声の質や日本語の発音がきれいな人が少なく
ない。音声的に、きれいな日本語が聞けるのは、テレビ番組よりもむしろラジオである。そし
て、地域性や生活性の強い内容が多く、日本の流行や地域の様子を知らるのに、ちょうど
よい教材になるであろう。話芸などの娯楽番組も、さまざまある。

このように、会話や聞き取りなど音声的訓練の環境としても、インターネットが利用で
きる可能性が生まれてきた。今のところは、利用できるコンテンツが限られているので、短い聞
き取り教材の作製にっては、どうであろうか。手順としては、今までのテレビ番組、ビデオ
などの利用と同様に考えられるが、音声だけなので、その点に注意する必要がある。

準備 1：5 分以内の番組を選択して該当するMP3を、CDにコピーする。長す
ぎると、画像がないだけ学生の負担になるであろう。また、話し声のきれいな
ものや、方言や男性女性の声など音声的に変化に富んだものを選ぶと、音

声的に興味をひけると思われる。

準備 2：文字起こしをして、単語や文型などと内容を検討し、指導事項を決める。

たとえば、異文化コミュニケーションの点から、関西、東北、九州沖縄など方言がよく出ている番組を選べば、日本の地域の多様性をラジオ放送、インターネットの文字と視覚情報から考えることができる。

第 1 回目：聞き取りと内容の討議

C D で学生に聞かせ、聞き取り練習を行ない、次は聞き取れた内容を話題にして話し合う。たとえば、ファッションを話題にした内容を選べば、関連のあるインターネットのサイトの資料を探してもらい、実際のファッションはどうか、台湾とどこが似ていてどこが同じかなど、ファッション分野での異文化コミュニケーションを話題にできる。

第 2・3 回目：インターネットラジオのコンテンツ検討

インターネットラジオの各種の番組を教室で紹介し、その他の番組を聞いて、学習者の反応をみ、興味のある内容を話し合う。今度は、学習者に短い番組を選んで、文字起こしをさせて発表させ、どんな日本の社会や生活が分かるか、討議する。

第 4 回目：音声ブログ紹介

音声ブログなど、新しいインターネットのコンテンツを紹介し、興味のある内容について、台湾の場合と比較する。

このようにインターネットラジオを糸口にして、聞き取りや会話の授業に繋げる方向はさまざまに考えられる。

また、個人利用ならばコピー自由なコンテンツとして公開されているので、学生が好きな内容を MP 3 プレーヤーにコピーして利用したり、ADSL の環境があれば、ラジオ代わりに、日本語放送をかけっぱなしにして、毎日、気楽に日本語の会話音声やモノログに親しむこともできる。

今後、コンテンツの多様化と充実が進めば、台湾を始め海外では、情報源としてだけでなく、大変注目される日本語音声に関する教材源になるであろう。

7. おわりに

インターネットは、今まで、文章や写真によるデータベースとして、もっぱら情報源として、学生や教員に利用されてきた。論者も、文書を印刷して配布し教材にしたり、写真を見

せて説明に使ったりする使い方ができてこなかった。しかし、今、述べてきたように、今後は、ブログなどによって自分もその資料の提供者や討論者として中に入ることができ、その点で、今まで受容的だった読み手から、双方向性のある書き手に位置が変わりつつある。授業案で示したように、たとえば会話、作文の授業などと組み合わせて利用すれば、日本語の会話力や作分力の向上に役立つ訓練の場にできる可能性がある。

また、インターネットは、インターネットラジオなど、従来のメディアがインターネットに参加することで、新しい教材としての広がり生まれて来た。日本語環境では、まだ途に付いたばかりで今後の展開が待たれるところだが、欧米同様に日本でも、こうした旧来メディアのインターネット化は不可避であろう。学生達に、そうしたインターネットの進化を利用して、学習に生かすように勧めることは、今後、ますます重要になる。有効な利用法も模索されるべきであろう。

旧来のテープ・ＣＤ、ビデオ、コンピュータソフトに替わり、テレビ番組、音楽、ＤＶＤ、インターネットという情報通信メディア環境が、「生の日本（語）」への接触源となり、また、日本人との交流の場ともなりつつある現状を正視して、私たち教師もそれに向き合いながら、学生のインターネットへの傾斜という変化を日本語力の向上につながるように生かしていくのが、今後の台湾での日本語教育の課題の一つであろうと言えよう。

それは、二者択一のような旧来の方法を棄てる淘汰ではなく、今まである素材に加えて、新しい有効な手段を開発するという、多様化であり進化である必要があると思われる。そして、質の面では情報とメディアのリテラシーの視点を取り入れることで、学習者に情報通信メディアに対し娯楽としての受動的な接し方から、「生の日本（語）」の社会文化を理解し台湾からも発信する、インターアクションに繋げることが大切である。

こうした機会にアイデアを出し合いながら、今後も教育内容と手段の多様化を、ともに考えていきたい。

本論文於 2006 年 8 月 31 日通過審査。

参考文献（雑誌、図書のみ）

- 石井敏・久米昭元（2005）『異文化コミュニケーション研究法』有斐閣
- 大塚英志(2004)『「おたく」の精神史』講談社
- 川口義一・横溝紳一郎（2005）『日本語教育ガイドブック（上・下）』ひつじ書房
- 教育部統計処（2004）『大學生學習及生活意向調查報告』PDF 版
- 小池生夫・寺内正典・木下耕児・成田真澄編（2004）『第二言語習得研究の現在』大修館書店
- 黃愛玲(2005)「自発学習支援への一試案—支援プログラムの開発とその効果を中心に—」『2005 年日語教學國際會議論文集』東吳大学日文系
- 蔡茂豊（2003）『台湾日本語教育の史的研究（下）』大新書局
- 蔡茂豊（2004）「四段階に見る台湾の日本語教育」『日語教育與日本文化研究国際學術研討會會議録』台湾日語教育學會
- J.V.ネウストプニー(2002)「インターアクションと日本語教育—今何が求められているか—」『日本語教育 112』日本語教育学会
- 鈴木みどり（2004）『Syudy Guide メディア・リテラシー 入門編（新版）』リベルタ書房
- スーザン・J・ネイピア(2002)『現代日本のアニメ—『AKIRA』から『千と千尋の神隠し』まで—』中央公論社
- 独立行政法人・国立国語研究所（2005）『2004 年度台灣日語教育之學習環境與學習方式調查統計結果報告書』
- 菅谷 明子(2000)『メディア・リテラシー—世界の現場から』岩波新書
- 杉村泰(2005)「コーパスを利用した日本語文法教育」『2005 年日語教學國際會議論文集』東吳大学日文系
- 名嶋義直（2006）「異文化理解リテラシー育成に向けて—日本事情授業における取り組みから—」『日本語教育 129』日本語教育学会
- 西口光一（2005）『文化と歴史の中の学習と学習者』凡人社
- 馮秋玉・西郡仁朗・林文賢（2005）「マルチメディア教材による日本語の有声子音・無声子音の知覚学習」『2005 年日語教學國際會議論文集』東吳大学日文系
- 馮寶珠（2005）「日本語 CALL 教育の学習効果について」『台湾日本語文學報 20』台湾日本語文学会
- 藤井彰二（2005）「日本語世代は何をどのように用いて学習しているか—日本語教育の学習環境と学習手段に関する調査研究—」『日語教育與日本文化研究国際學術研討會會議録』台湾日語教育學會

- 藤村知子・菅長理恵(2005)「CD-ROM教材『日本事情テキストバンク』の開発について」『日語教育與日本文化研究國際學術會議論文集』台湾日語教育学会
- 葉淑華(2005)「DLL 應用的探討」『2005 年日語教學國際會議論文集』東吳大学日文系
- 李漢燮(2005)「コーパスを利用した日本語・日本語教育の研究」『2005 年日語教學國際會議論文集』東吳大学日文系
- 林俊成(2005)「字型認知を用いた漢字学習ソフトウェアの開発」『日語教育與日本文化研究國際學術會議論文集』台湾日語教育学会
- 林文賢(2005)「e-Learning サイトの構築と運営力の養成についての一考察」『2005 年日語教學國際會議論文集』東吳大学日文系

【日本語要旨】

日本国立国語研究所の調査では、台湾人学生の好む教材は、「生教材」で、日本との直接接触を希望している。教師側では、台湾人教師は学生が希望しない学習用教材に関心を持ちすぎ、日本人教師は学生が希望する日本語の生教材に関心を持っていない。このミスマッチは、台湾の日本語教育界で今後、大きな問題となる。そこで、本論文では、学生の生教材への関心とインターネットへの興味をデータから紹介し、日本での情報とメディアリテラシーを取り入れ、新たに登場してきたブログなどを授業で活用するアイデアを提案した。

【キーワード】

日本語教育 生教材 情報 メディア・リテラシー ブログ